
隣の男

長月 タ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣の男

【Nコード】

N0786A

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

佐藤さん、僕はあなたのことが本当に嫌いなんですよ。

隣の男が、僕は嫌いだった。仕事もせず酒ばかり飲み、女房子供を苦労させる。そういう男を僕は無条件で嫌う。

僕は当時ありがちな貧乏学生で、掃き溜めのようなアパートで暮らしていた。そんな僕が驚くほど、その人々の暮らしは貧しく、まさに生活全体が掃き溜めだった。中でもその男を、掃き溜めの腐ったごみだと思っていた。

春の晴れた日、僕は申し訳程度のアパートの庭で、本を読んでいた。そこへあの男が酒臭い息で近寄ってきた。

「先生、読書ですかい」

男は僕の隣に腰をおろした。男は僕を先生と呼ぶ。ご大層な事だ。「ええ」男の顔も見ずに答えた。そんな僕の態度を気にする事もなく、というかそんな雰囲気はこの男がわかるはずもないが、ぼんやりと空を見上げて、突然男は話し始めた。

「俺はこう見えてもね、先生。南方に戦争に行ってた事があるんださあ」

僕は特に相槌を打たなかったが、男はそのまま話し続けた。

「先生、手榴弾って知ってますかい？知らねえだろうな。いや、別に馬鹿にしてるんじゃないですよ。手榴弾を知らない、いい事じゃないですかい。平和なこった。これがね、魚をとるのによく使ったですよ。船で沖に出るとね、魚がね、見えるんですよ、そこいらにで、そこめがけて手榴弾を投げ込む。すると下で爆発して気絶した魚が浮かんでくる。ええ、先生。ほんとですよ。でもちつと失敗すると爆発が遅すぎて魚があがらない。投げ込むのが遅いとこつちの右手が吹っ飛んじゃまう。まあ、ちつと難しいかもしれないですね」

次に何を言うかと僕は内心言葉を待ったが、男はそれきり黙った。横顔を盗み見ても、酒で赤く光っているだけだった。

男は唐突に立ち上がると、アパートに引き上げていった。

「佐藤さん」

僕は不意に呼び止めた。赤い顔がゆっくりと振り向く。

「はい、何ですかね」

シャツがだらしなくズボンから出て、ズボンの片方は靴下の中に入っている。

「いや、足元、気をつけて」

「ご忠告、ありがとう」震える手で敬礼した。

男はその夏に肝臓を患って死んだ。死に顔だけは、君子のように立派だった。散々苦労した女房も子供も、何だかとても大事な人を亡くしたような顔をしていた。

僕は棺を覗き込む。

ねえ、佐藤さん。僕はあの暖かい春の日差しの中で、手榴弾で魚釣りをする話の後、本当はこういう事を聞いてみたかったですよ。「その戦争で、あなた本当は、何をしたんですか？」ってね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0786a/>

隣の男

2010年10月12日14時41分発行